



広島平和啓発施設見学会 報告

平成26年8月5日(火)～8月7日(木)

目的

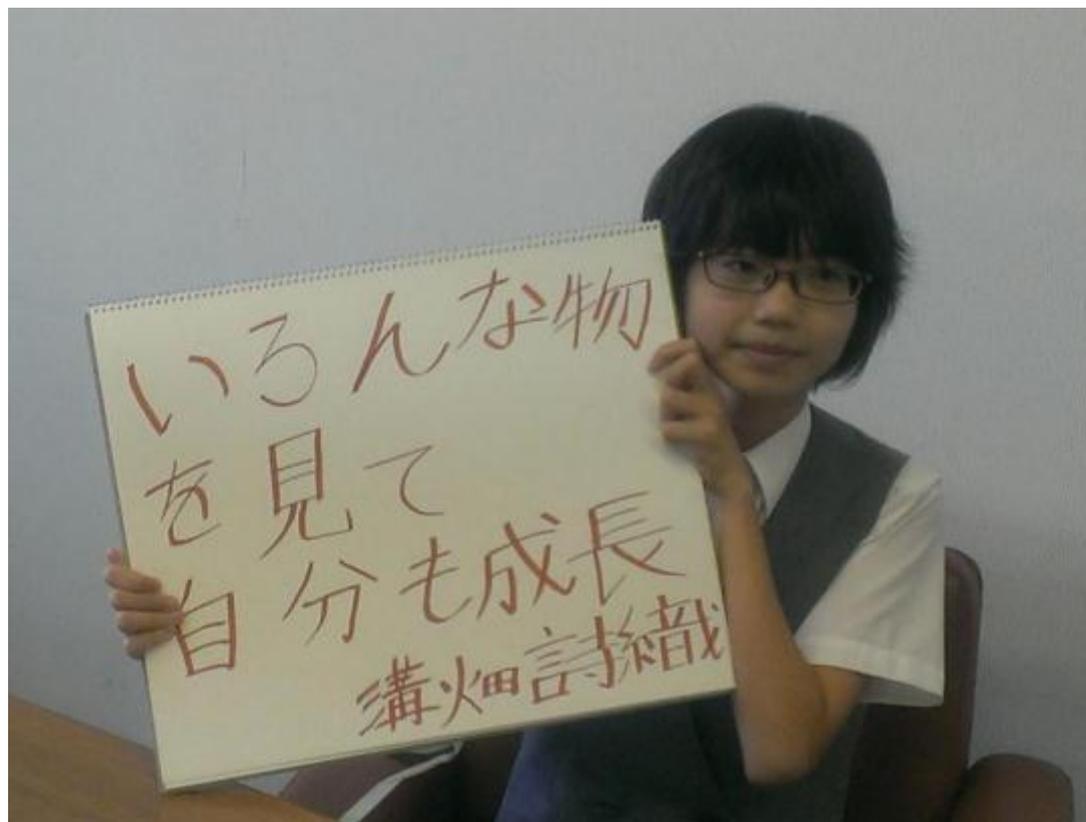
- 世界の平和は、人類共通の願い
- 次世代に平和の大切さを伝えていくことが必要
- 発信できる人材を育成

広島平和啓発施設見学会を実施

参加者 羽村第一中学校



柴田 瑞稀
(しばた みずき)



溝畑 詩織
(みぞばた しおり)

参加者 羽村第二中学校

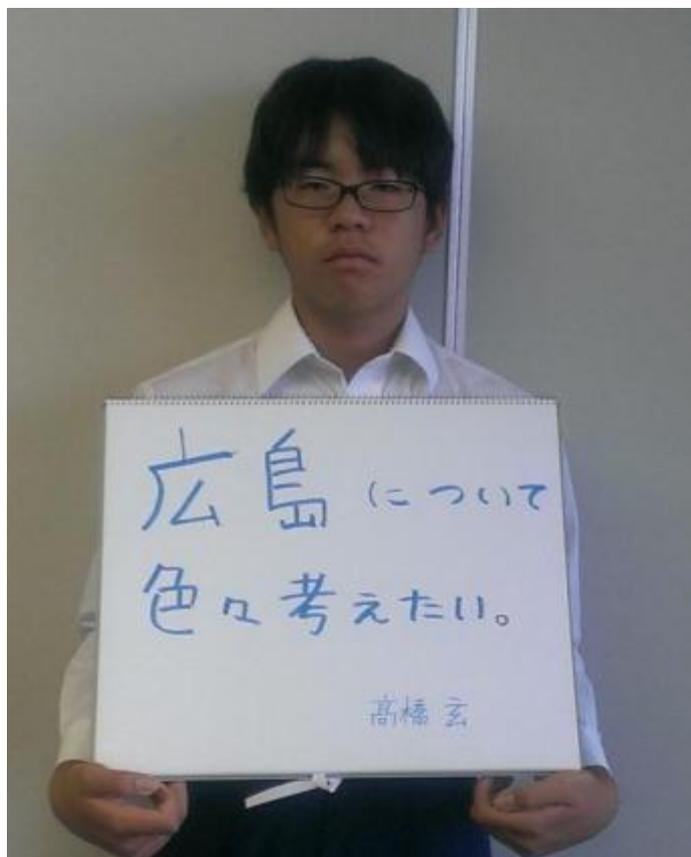


副島 陸
(そえじま りく)

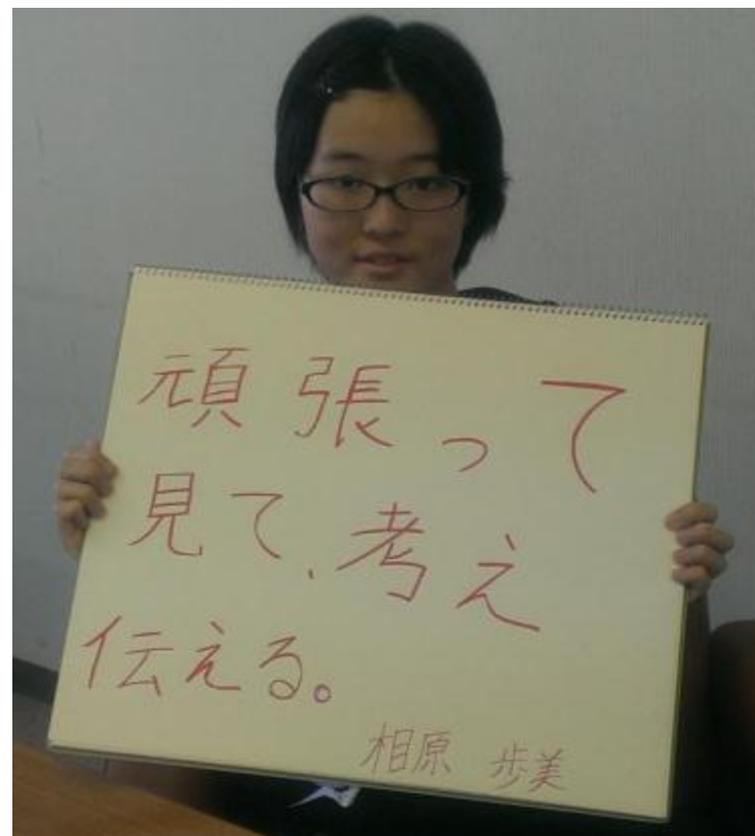


門原 志歩
(かどはら しほ)

参加者 羽村第三中学校



高橋 玄
(たかはし はるか)



相原 歩美
(あいはら あゆみ)

引率者

- 羽村第一中学校
教諭 福田 恵一
- 羽村市企画総務部企画政策課
主査 高岡 弘光
- 羽村市企画総務部企画政策課
主任 笹本 弘子

全体スケジュール

7月11日(金) 説明会・事前研修1回目

7月31日(木) 事前研修2回目・出発式

8月5日(火)～7日(木) 広島施設見学等

8月13日(水) 事後研修

8月15日(金) 報告会



事前研修

広島でのスケジュール

8月5日(火)

ヒロシマ青少年平和の集い

8月6日(水)

広島平和記念式典参列

A班 第一県女の原爆体験談を聞く

原爆体験談を聞く

B班 広島平和記念資料館・慰霊碑等見学

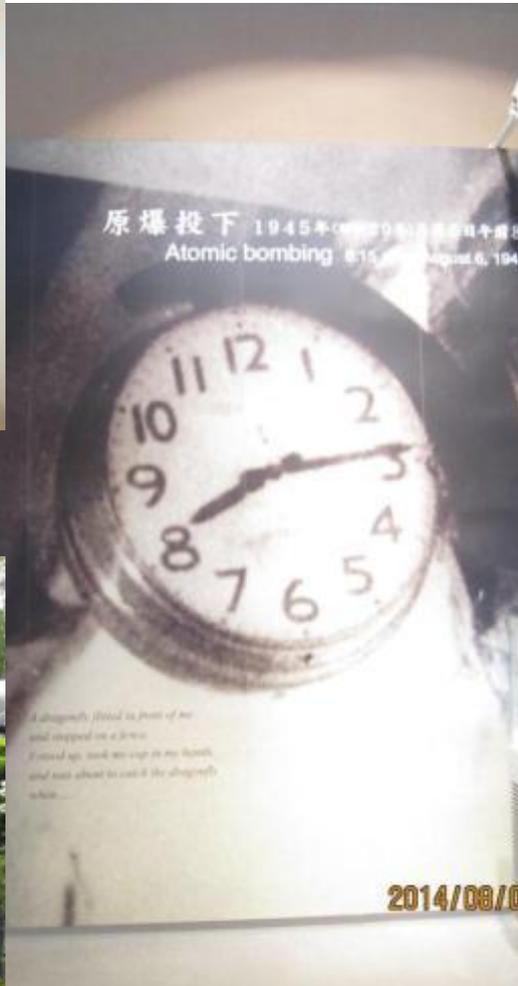
8月7日(木)

A班 広島平和記念資料館・慰霊碑等見学

B班 広島二中の原爆体験談を聞く



参加者報告



第一県女1・2年生の被爆から



広島第一県女原爆犠牲者追憶之碑

私たちは、当時、広島第一県女1年生の梶山さんと、2年生の大野さんから、原爆体験を聞きました。



原爆体験談 梶山さん(広島第一県女原爆犠牲者追憶之碑)

あの日(8月6日)、

県女の1年生は建物疎開の作業をしていました。
梶山さんは、体調を崩して休んでいたそうです。

2年生の大野さんは、少し離れた所にある工場で、作業をしていた
そうです。



ヒロシマ、遺された九冊の日記帳

大野さんは、県女の一年生9人が遺した日記について記された「ヒロシマ、遺された九冊の日記帳」の作者でもあります。

1945年8月6日の朝、原爆が落とされました。

建物疎開をしていた1年生は、ほとんどが亡くなりました。

2人は運良く生き残りましたが、「自分たちだけが生き残ってしまった」という罪悪感を感じ、辛い思いをしてきました。

それでも、私たちに当時のことを話して下さいました。

これから、当時のエピソードを聞いて、私たちが思ったことを伝えます。



梶山さんと大野さんは、戦時中、広島県立広島第一高等女学校に通っていましたが、今とはまったく違う、大変な環境で学んでいました。

県女の生徒は成績がよく、勉強をしたい人達が集まっている学校でしたが、戦時中のため、勉強をすることがあまりできませんでした。

物不足により、自分たちの制服などを授業の中で作る、被服の授業ばかりが増えていき、空襲警報で学校に行けなかったり、勉強できる時間が減ったりしました。

当時の子どもたちは、このような環境でも、自分から学ぶ意志を持っていて、すごいと思います。



女学生の夏服とシミーズ
(広島平和記念資料館)



原爆体験談 大野さん、梶山さん

私たちは、いくつかの質問を考えていました。

「戦争中は辛い」「知り合いが疎開したら悲しい」と思っていたので、「辛い時の心の支えはありましたか」と質問をしました。

すると「辛くなく、戦争中の暮らしの中に、楽しみを見つけて過ごしていた」そうです。

それを聞いて、今と昔で「あたりまえ」は違うと思いました。

今、「疎開」はあたりまえではありませんが、昔は、「お国が決めたこと」であって、あたりまえだったのです。だから、悲しいとか、辛いとか思わなかったそうです。

戦時中の子どもたちは、「日本の敵であったアメリカのことを恨んでいた」のだと思っていました。

ところが、アメリカを、恨んでいる方の中にも、意識に違いがあることが、印象に残りました。

その理由は、周りの環境にありました。

大野さんは、近所に、戦時中でありながらアメリカへ出稼ぎに行き、当時、あまり食べることのなかったホットケーキを食べ、コーヒーを飲んでいて、少しうらやましい面もあったそうです。

梶山さんは、アメリカの生活スタイルを知らなかったため、憧れはなかったそうです。

さまざまな国が、お互いをよく知りあうことが戦争を防ぐことになると思いました。

二人は、「学校で先生が言っていることを聞いているだけでなく、自分でちゃんと考えることが大切」と言いました。

私たちも、自分たちで考えて行動することが大切だと思います。
皆さんも、平和に関する自分の考えを持ってほしいと思います。

今、日本は戦争をしない平和な国です。
しかし、近いうちに戦争をしてもよい国になってしまうかもしれません。
戦争が始まれば、戦争のない今の「あたりまえの生活」ができなくなるかもしれません。

私たちは、今の「あたりまえの生活」を続けられるといいと思います。
みなさんも平和について考えてみて下さい。



広島第一県女原爆犠牲者追憶之碑

広島二中1・2年生の被爆から



いしづみ

これは「いしづみ」と言う本です。

「いしづみ」には、広島県立広島第二中学校の321人の1年生の全滅までの悲惨な様子が描かれています。

8月6日、世界で初めて、原子爆弾が落とされました。
誰も予想していなかったでしょう。

当時、広島二中は今と違って五年制で、3年生以上は勉強せずに軍事工場へ働きに行っていて、1・2年生だけが学校に残っていました。



この写真は、平和資料館で展示されていた当時の中学生の衣服です。

当時の中学生は身長が低く、体格も小柄で、食べ物が思うように食べられていないことがわかりました。

広島二中の1年生は、8月6日は建物疎開で本川土手で作業していました。当時は、ほとんど勉強することができず、お国のために働いていました。

その1年生が建物疎開していた場所には、今、広島二中の慰霊碑が置かれています。

被爆した中学生の衣服(広島平和記念資料館)



原爆体験談 新出さん(広島県立第二中学校慰霊碑)

広島二中の慰霊碑の前で一緒に写真を撮っていた新出稔雄さんは、当時、広島二中の2年生でした。

偶然、出会うことができ、お話を聞きました。

この慰霊碑の場所は、爆心地から500～600mの近さです。

8月6日8時15分、原子爆弾が広島に投下されました。

広島駅の北側で作業していた新出さんは、熱風に吹き飛ばされ、ヤケドを負ったそうです。

最初に「ピカッ」と光り、後から「ドン」という爆音が聞こえたことから、当時は、原子爆弾を「ピカドン」と呼んでいたそうです。

その一瞬で、広島二中の生徒の3分の1が死んでしまったようです。

亡くなった方の中には、遺体が見つからず、遺留品がほとんどない人もいました。大ヤケドで顔がわからなくなり、名札などで、誰なのかがわかった人もいたようです。

運よく生き延びた人も、帰宅途中で行き倒れたり、川でおぼれて死んでしまったり、家にたどりついた人も数日後には息を引き取ってしまいました。

こうして広島二中の1年生321人は全員亡くなってしまいました。



原爆体験談 故選さん(教専寺)

私たちは、当時広島二中1年生の故選浩行さんの弟、故選一法さんから話を聞くことで、浩行さんがどのように被爆したのか、詳しく知ることができました。

8月6日、浩行さんは、他の生徒と一緒に建物疎開作業のために集まっていました。

そして、8時15分、投下された原子爆弾が、島病院の上空で爆発しました。

浩行さんは、原爆の強い光により一時的に失明しましたが、手を引いてもらったり、馬車に乗せてもらったりして、家のある草津の国民学校までたどりつき、居合わせた近所の人に、担架で運んでもらい、自宅に帰ることができました。

浩行さんは、翌日、広島二中の2年生の方が見舞いに来られたあとに亡くなりました。

亡くなる直前、浩行さんは、お母さんと、はっきりと話していたそうです。



故選さん(教専寺)

浩行さんは自宅で亡くなりましたが、足取りが残っていたり、家までたどり着いた生徒は少なかったそうです。

ほとんどの生徒が、爆発の瞬間に亡くなったり、飛び込んだ川の中で力尽きたり、帰ろうとして途中で倒れ、行方不明になってしまった生徒も多くいたそうです。



原爆体験談 小畑さん(教専寺)

いしぶみに書かれている、浩行さんをお見舞いした、当時広島二中の2年だった小畑彰三さんにもお話を聞くことができました。

小畑さんたち2年生は、爆心地から約2km離れた、広島駅の北側で作業をしていたため、多少の火傷は負ったものの、重い後遺症にはならず済んだそうです。

爆心地の方からは、もくもくと、きのこ雲がのぼっていましたが、何が起こったのか分から

なかったと言っていました。

しばらくして、被害のあった方へ行ったところ、繁栄していた街は、無くなっていて、瓦礫の山と化した、焼野原が広がっていたそうです。

周りには、原爆の熱に巻き込まれて、皮膚が溶けて、たれさがってしまっている人々が助けを求めて彷徨っていたそうです。



被爆者再現人形(広島平和記念資料館)

平和資料館でも、その悲惨な光景が再現されていました。

小畑さんは「彼らを助けてあげられなかったことを、とても後悔している」と言っていました。

思い返してみれば、僕たちが広島二中の慰霊碑に行った時に出会った、新出さんも、同じことを言っていました。

そこで僕たちが感じたのは、被爆した方々は、自身が辛い目に合っているけれど、自分たちの大切な人たちを亡くした遺族の辛さが、どれほど大きなものなのか、そして、それほど戦争は悲惨である、ということでした。



原爆死没者慰霊碑

戦争について記した数字だけを見て理解しようとするのではなく、慰霊碑を読み、そして実物を見て、原爆体験者の話を聞いたことで、戦争の悲惨さや、今の平和な世の中を維持することの重要さが身に染みました。

絶対に忘れる事の出来ない、貴重な体験でした。

語り部の人達が、戦争を知らない若い世代に語っているのは、次世代の平和への願いだと思うので、僕たちも、その願いを心に受け止めて、身近な人たちや、自分たちの後の世代へ、平和の精神をつないでいけるよう、努めていきたいと思えます。